



JISSEN

NO. 11

TAKE
FREE

CONTENTS



03-09 ジェンダー視点からの仏教と実践活動

10-11 実践真宗学研究科公開シンポジウム
看護仏教の連携を求めて～多死社会の終末
期に看護者と佛教者は何をすべきか～

12-13 「研究紹介」
小西益子
帰依龍也

14 法話「御同朋について」
佐々木 正暁

15 実践真宗学研究科 Youtubeチャンネル

編集長

吉水 昌洋

編集者

小島 かるな 城 大真 長谷川 憲寿
帰依 龍也 高橋 烈 保々 光耀

デザイナー 姜咨任

スペシャルサンクス 小西 益子 佐々木 正暁

| JISSEN NO.11 |

2021年3月 発行

発行:実践真宗学研究科 出版活動部会

〒600-8268

京都市下京区七条大宮東入大工町 95

龍谷大学清風館3F 実践真宗学研究科合同研究室

TEL 075-366-0621



GRRC創設記念シンポ

2020年1月6日、龍谷大学（GRRC）創設記念シンポジウム「誰ひとりとしてとり残さないジェンダーと宗教の視点から」が開催された。オンライン配信され、約500人が視聴した。GRRCは、2020年4月に龍谷大学の推奨する「仏教SDGs」の実現に向け創設された。



入澤学長の挨拶の後、竹安栄子・京女子大学学長が「女性が輝く社会の実現を目指して」と題して基調講演を行った。ジェンダー（社会的・文化的に形づくられた性差）に基づく社会的差異として男女の所得格差を指摘し、女性は社会的に不公平・不平等な立場に置かれていると述べた。日本がジェンダーギャップ指数（GGI）世界121位となっている大きな要因として「政治領域」をあげ、すでに120カ国で導入されている選挙制度「ジェンダー・クオータ（割当制）」の必要性を強調した。「意思決定領域における日本はジェンダー格差の解消は、単なる理念でなく、組織のそのものの存続にきわめて重要なカギになる」と指摘し、日本議会議員に占める女性比率がわずか2%（このうち本願寺派は0%）であること、教団の事務局における職員の上位職階には女性がほとんどいないことなどをあげ、仏教界は「圧倒的男性優位の構造である」と批判。GRRCの創設は、「宗教界に変革の契機をもたらす大きなインパクトを持つ」と期待した。

その後GRRCユニット2リーダーの猪瀬優里・龍谷大学准教授が提言。ジェンダーという用語を「性というものを手掛かりにして人や社会のあり方を形づくってしまう働きをもつ現象、作用をしめす概念である」とし、ジェンダーも宗教もこの世界をつくる重要な要素であると指摘。SDGsの目標を掲げる2030アジェンダに

都女子大学学長が「女性が輝く社会の実現を目指して」と題して基調講演を行った。ジェンダー（社会的・文化的立場に置かれていると述べた。日本がジェンダーギャップ指数（GGI）世界121位となっている大きな要因として「政治領域」をあげ、すでに120カ国で導入されている選挙制度「ジェンダー・クオータ（割当制）」の必要性を強調した。「意思決定領域における日本はジェンダー格差の解消は、単なる理念でなく、組織のそのものの存続にきわめて重要なカギになる」と指摘し、日本議会議員に占める女性比率がわずか2%（このうち本願寺派は0%）であること、教団の事務局における職員の上位職階には女性がほとんどいないことなどをあげ、仏教界は「圧倒的男性優位の構造である」と批判。GRRCの創設は、「宗教界に変革の契機をもたらす大きなインパクトを持つ」と期待した。

GRRCの研究員である川橋範子・国際日本文化研究センター客員教授は、ジェンダー不平等な仏教界の現状を述べて「誰ひとりとしてとり残さない」社会の実現を目指すことを提言した。GRRRCの研究員である川橋範子・国際日本文化研究センター客員教授は、ジェンダー不平等な仏教界の現状をとりあげ、「最もジェンダー平等を必要としているのが仏教教団」であり、「仏教（宗教）研究の知見からジェンダーフレンドリーの実現に取り組むこと」、「ジエンダーフレンドリー研究の知見から仏教（宗教）の平等理念の実現に取り組むこと」の一つかあるとし、「どちらかだけでは足りず、両者は互いに補い合う関係にある」と提言した。提言後のディスカッションで入澤崇・龍谷大学学長は、「各宗派の教団は、社会に開かれた教団を目指すといいながら前に進まない。自分たちの足元を見ていながらではないか」と指摘。「宗教と教団が差別性を内包していることに気づかず、いくら社会に開かれた教団といつても説得力がない。そこに女性がない、それ自体が社会に通用しない」と述べ、GRRCの研究活動は各教団の変革につながるのではないかと期待を寄せた。

| インタビュー

「ジェンダー視点からの仏教と実践活動」|

シンポジウムに参加した私たちは、ジェンダーが宗教者の実践活動にも深く関わっているのではないかと考えた。ジェンダーの視点によって私たちは何に気づかされ、何を考え、どう行動に移すべきなのだろうか。GRRCセンター長であり、文学部真宗学科准教授の岩田真美先生（以下敬称略）、GRRCユニット4（ジェンダーの視点から宗教の公益性に関する研究を行う）のリーダーであり実践真宗学研究科教授の中村陽子先生（以下敬称略）のお二人に、ジェンダー視点から見た仏教とその実践活動についてお話を伺った。



岩田真美先生

ジェンダーと宗教研究センター長。龍谷大学文学部真宗学科准教授。専門は近世から近代にかけての真宗教学史、女性と仏教に関する研究。主な共編著に『カミとホトケの幕末維新—交錯する宗教世界—』（法藏館、2018年）、『仏教婦人雑誌の創刊』（法藏館、2019年）、『近代真宗「女性教化」資料集成』第1～4巻（三人社、2020年）がある。



中村陽子先生

ジェンダーと宗教研究センター、ユニット4リーダー。龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授。ソーシャルワーカー、看護師としての勤務経験をもとに、仏教と医療・福祉・介護の連携について研究。多死社会を迎え、これから死は多くの人々にとって最大の課題である。地域包括ケアシステムにおける地域での「看取り」を可能にするための仏教と医療・福祉・介護の連携・協働について、またこれまで仏教が地域で築いてきた相互扶助の文化について研究。



小島（院生）：まず岩田先生にお伺いしたいのですが、先生は近年、仏教婦人雑誌や女性教化に関するご研究をしておられると思います。先生がジェンダーについての問題意識や、ジェンダー視点によるご研究に関心を持つ経緯を教えていただけますか？

岩田：はい。私はもともと真宗教学史が専門で、近世から近代のことを研究していて、ジェンダー や「仏教と女性」ということが研究のメインテーマではなかったんです。そういう問題に関心を持つたきっかけは、龍谷大学で仏教とジェンダーに関する講演を聞いたことです。

龍谷大学アジア仏教文化研究センター（BARC）（第1期2010～2014年度、第2期2015～2019年度）において、仏教とジェンダーに関するシンポジウムや研究会が行われるようになりました。第2期BARCでも那須英勝先生がユニットリーダーを務められた「多文化共生社会における日本仏教の課題と展望」において研究が進められ、その成果として出版されたのがこの本（『現代日本の仏教と女性－文化の越境とジェンダー』*1）です。「ジェンダー」という視点からのアプローチが仏教の研究にも実践にも大事なんだと気づかされ、関心を寄せるようになりました。

日本仏教の課題と展望において研究が進められ、その成果として出版されたのがこの本（『現代日本の仏教と女性－文化の越境とジェンダー』*1）です。「ジェンダー」という視点からのアプローチが仏教の研究にも実践にも大事なんだと気づかされ、関心を寄せるようになりました。

真宗の場合と違い、他の仏教諸宗派は江戸時代まで肉食妻帯が許されておりませんでした。しかし「出家主義」を理念とする教団においては僧侶の「妻」とか「家族」という用語が今でも曖昧なんですね。男性僧侶規定が今でも曖昧なんですね。男性僧侶である夫が先に亡くなつた場合、その配偶者である妻や家族が、寺から追い出されたり、肉食妻帯が解禁される形にはなりました。だからそういう意味では女性たちは不安定な位置にいるのです。

岩田：この本の序章を担当しておられる川橋範子先生、今もジェンダーと宗教研究センターの研究員として関わってくださつて、創設記念シンポジウムでも提言してくださいました。私はBARCの研究会で先生の講演を聞いたことが、ジェンダーに関心を持つきっかけの一つになつていています。

川橋先生は、プリンストン大学大学院で宗教学の分野からジェンダー研究をされ博士号を取得されました。アメリカで教育を受けてこられた先生が曹洞宗の僧侶の配偶者（寺族）となり日本佛教界の現状を知った時、衝撃を受けられたのではないかと思います。先生はジェンダーと宗教研究の第一人者として、ジェンダー不平等な日本社会や佛教界の問題に対しても実践的に取り組み、発信を続けて

彼女たちはそういういた抑圧的な環境にあつて悶々としていても、発信する場がないんですね。教団の意思決定機関に女性はいないわけなので意見が言えない。現場にいる女性たちの声は届かないんです。研究会などを通して、様々な宗派の女性たちの現状を聞きました。そのなかで、第1期BARCのセンター長であつた桂紹隆先生にこう言わされました。「私たちは研究者として発信できる立場にある」「現場の人たちは声をあげたくもなかなか発信できないんだ」と。その時はまだ本学の佛教系の学科には女性教員が自分しかいなかつたんですね。女性だからといふことではないですが、やはりそういうことではあります。た現場の声を発信していく義務があるんじゃないかつて自分で思うところがあつ

小島：発信する場のある研究者として、現場の女性の声を伝えたいという思いがあつたんですね。

岩田：はい。いつかそういうことをやりたいと思つて企画書を書いたりしていったのですが、あるとき佛教史の中西直樹先生がそれを読んでくださったんです。中西先生も京都女子大学などの年史を書いておられ、近代日本での佛教女子教育のご研究をされていたので、問題意識を共有するところがあつて、共同研究をやろうという話になりました。そして今の世界佛教研究センターの前身の一つである仏教文化研究所の公募で共同研究をするようになりました。

本願寺派では女性僧侶といふのは近代まで認められておりました。昭和6年に初めて認められたのは近代になりまし^{*2}た。近世までは女性は「教化される」と位置づけられ、近代になつてはじめて「教化する」側に立てるようになつたわけですね。よね。明治になつて女教士^{*3}とか、仏教婦人会ができるタイミングで、女性が女性に教化するという流れが出てきました。女性が教化を「される」側から、「する」側へと少しずつ変化していく、その過程はどう起つたのかということに関心がありますね。ジェンダーは時代によつて変化していくので、歴史

化研究センターは第1期から第2期に引き継がれ、ジェンダーの問題も定期的に議論されました。が、2019年度で終了してしまつたんです。ジェンダーラーの研究がはじめて龍谷大学で本格的に発信されはじめたのに、そこで終わってしまうのか。という問題意識がありまし

小島：そういつたご研究をはじめられて、センターカ創立に至つたのはどういった経緯だったのでしょうか。

を通して見えてくるものがあります。その教訓を現代の課題にいきませたらと思ってます。

小島：なるほど。そのような経緯だったんですね。

育にしても貧困にしてもジェンダーは絡むんです。ジェンダーという視点からアプローチするということはとても大事な課題だと考え、そういうことも企画書に書いて応募したところ、採択されて、今に至るというこ



ジェンダーは自らを見つめ直す視点

岩田：「ジェンダーと宗教」の研究を行う日本で唯一のセンター創設が認められて、シンポジウムでは学長もその必要性について外に向かつて発信して下さいましたし、「朝日新聞」「京都新聞」など多くのメディアにも取り上げてもらいました。そういう意味ではジェンダーというものは現代社会において大事な問題であることが一般的の認識なのかなと思いました。

そのタイミングで龍谷大学の重点強化型研究推進事業^{*4}が、「ジェンダーと宗教研究センター」ということで企画書を書いた、トライしてみようと思つて。龍谷大学が推薦する「仏教SDGs」にはジェンダーの視点が必要ではないかと考えていまし

た。近年は各佛教団もSDGsに取り組むということを打ち出していますが、ジェンダーに關してはほとんど注目されない色んな問題の全てにジェンダーは絡んでくるわけです。SDGsの第5の目標に掲げられて

岩田：そうですね。例えば仏教婦人会の「婦人」という言葉 자체ですね。シンポジウムの際に竹安先生は「仏教女性会」に変更すべきだと提案されました。なかなか名称を考えることも難しいかもしれないんですけど、竹安先生が名言をおっしゃつていましたよね。

城(院生)：「言葉は意識の反映であると同時に意識を規定する」でしようか?

[2] 昭和6年7月27日、「女子ノ教師準教師ニ関スル規定」が発布され、同年23名の女性僧侶が誕生(『増補改訂 本願寺史 第三卷』)本願寺出版社、2019年、p335)。

[3] 明治42年に僧侶以外が任じられる教士・女教士が設置された。この設置は、社会の進展に対応した多様な布教にともない、布教伝道を僧侶の専有にすることなく、女性の社会進出を背景に人材を広く信徒のなかに求めて布教伝道の担い手を育成し、教線拡張の必要性が認識されたためであった(『増補改訂 本願寺史 第三卷』)本願寺出版社、2019年、p329)。

[4] 先端的、学際的、独創的な研究の創出、促進、充実を図ることを目的として設立された学内資金によるプロジェクト研究支援制度。

岩田：そう。G R R C の清水先生をはじめ他学部の先生方が、「お裏方」や「坊守」といった言方に驚かれていました。教団内の私たちからすると普通に使っている言葉でも、「裏方は表には出られないの?」「坊守つてお坊さんをお守りするの?」みたいなことを聞かれて。これもジェンダーの問題だと思うんですよ。

私はセンターのサイトに「差別と権力を生み出す社会文化構造を明らかにするのみならず、自分がジェンダーの視点ではないでしようか。」って書いたんですよ。私たちが当たり前だと思つて用いている言葉や認識でも、外から見るとびっくりされる。ジェンダーの視点というのは自分が「当たり前だ」と思つている価値観を問い合わせ直すということでもあると思うんですね。お寺で育つと、住職はこういうもの、坊守はこうあるべきものといった「当たり前」がありますが、その価値観はもしかするとマジョリティ側（男性僧侶中心）の視点かもしれない。そこには女性や性的マイノリティの視点が外れているかもしれません。それはマジョリティの価値観に馴染めない男性をも排除してしまうかもしない。ジェンダーの視点を取り入れることにとっては、「自分のあり方つて実はマジヨリティ側に立つていんじゃないか、そこから外れて

しまう他者の痛みに本当に寄り添えていいのか?」というように、自分自身を見つめ直す視点でもあると思うんです。日本社会や仏教界を多様な組織に変えていくためには、色々な違いに気づいて他者の痛みに共感するという視点が大事だろうと思っています。

小島：女性自身も「住職や坊守はこうあるもの」というマジョリティの視点を内面化していると考えると、ジェンダーを考えることは、自分の苦しみと他者の苦しみに同時に気づいていく道のりでもあるようになります。言葉一つをとっても、ジェンダーという視点を通して様々なことが見えてくるなど、お話を聞いて思いました。

岩田：単なる「性差」ではないですよね。

歴史の視点に立つと、時代によつて女性の描かれ方は変わる。釈尊は皆平等に悟りの可能性があると言つたのに、時代や国の社会背景によつて変わってきた部分があります。社会、文化、歴史などが作り出していく直すということでもあります。社会、文化、歴史などが作り出されてきたものならば今後もまた変容していく可能性があるわけです。

小島：実践活動を行うときにも、気づかなければ差別を追認してしまったり再生産してしまうたりすることもあるかもしれませんよね。

岩田：気づかぬうちにマジョリティの視点で語られてしまうんですね。教理史や教学史でも研究対象としてはほとんど男性の僧侶しか出てこなくて、女性とか性的マイノリティの視点というのは周辺化されて、取り残されてしまいます。「誰ひとりとしてとり残さない」とSDGsが掲げているのは、現に取り残されている人たちが多くいるからそんなことを言わなくてはいけないわけですね。教団のなかにも、取り残されていると感じている人、声を発せない人達が沢山いる。じゃあ今、実践活動していくとか、社会貢献するということが宗教の姿として注目されているわけですが、そういった中で自分たちの足元に取り残されている人たちがいなかないか、多様な価値観を見落としているのかなという気に気づきを与えてくれるのがジェンダーの視点だと思うんです。

岩田：猪瀬先生もそういう風なことをおつしやつておられました。先ほどの本の中で川橋先生が紹介しておられます。「最近の宗教の公益性の議論は、宗教者による人々の貢献を無自覚な前提としているために、そのためには、誰のために、何のためには、どういった問いが不可欠なものである。そこでなければ、誰かに「貢献」をした内実を見極めるためには、誰のために、何のためには、どういった問いが不可欠なものである。その足で、別の誰かの足を踏んでいることを見逃してしまったかもしれない、と論じて

小島：そうですね。シンポジウムでも入ったが、いくら社会に開かれた教団といつても、その中に内包された差別に気づかないでいたら説得力がないということをおっしゃっていました。

中村：私は医療福祉施設などの医療の現場で働いていたのですが、介護・ケアのほとんどを女性が性役割として担っているという現状をずっと見てきました。当時はケアを行う人の八割は女性でした。嫁として義父母の介護を担う女性の様子も見ました。障害のある子どもを持つ夫婦が離婚するとき、必ずと言っていいほど女性側、母親が子どもを引き取つていく様子も見てきました。離婚して一番しんどい時に地を這うようにしてケアをしているわけです。

実践真宗学の役割と ジェンダー

小島：中村先生は看護師としてのご経験やご研究から、仏教者や宗教者の実践活動とジェンダーについてどうお考えですか？

それから制度が変わり介護保険や障害者の自立支援などが整つてきて、介護も社会化され専門職が担つたりしています。でもやはり介護・ケアというものは女性がする仕事だという意識はなかなか変わりません。看護教員として男性の看護師を指導していた時、患者さんが男性看護師に対し「お前男のくせに看護師にならぬのか、男が女の腐つたような仕事をするんじゃない」といつてスリッパやティッシュペーパーを投げつけるのを見ました。男性は心に傷を負い仕事を休むことになりました。

実践真宗学の役割の一つは、今の社会的問題に向き合い立ち向かう、そういう実践活動をするということですね。ジェンダーの問題について考えるとき、社会的性差はその人の人生を決定づけてしまうことがあります。先ほど

の男性看護師が仕事を休むことになつたり、生活の場面ではシングルマザーが貧困から抜け出せなかつたり。差別というのは、踏みつけられてどうしても乗り越えられない人がいる一方で、踏みついている人にはその気持ちがわからないということを学びました。

実践真宗学において社会的問題に取り組むとき、取り組む側の主体性が問われます。あらゆる平等を説く中で、差別や問題に敏感になれるか？それなくして、社会貢献と言わても、踏みつけられている人からしたら、お前が言うなとなりますよね。実践真宗

学における社会的課題というのは、実はあなたが持つているものであつて、あなた自身がものの見方を変え、人を踏みつけている自分に気づきながら取り組む、これが社会貢献の連携の最初だと思います。

岩田：はい。SDGsの「誰ひとりとしてとり残さない」というのは、自分自身が社会の中でみんなとどう一緒に生きていくのかという主体が問われる話で、ジェンダーの問題は特にそうだと思います。

岩田：全日本佛教会が開催したシンポジウム「佛教とSDGs」現代社会における佛教の平等性とは「女性の視点から考える」」を受けて、川橋先生は「コロナ禍の中で人々が寄り添う宗教者の重要性が強調されるが、コロナ禍では女性が多くを占めるケア従事者により大きいリスクがもたらされるよう、「パンデミックもジェンダーと無関係ではない＊6」と書いておられます。重要な指摘ですね。

教団内のジェンダーバランスとロールモデル

岩田：今回、創設記念シンポジウムにおいて猪瀬先生が調べてくださいましたが、今後はセンターにおいて、より詳細に各教団のジェンダー調査はやりたいと思っています。その数値を社会に公表しようと。浄土真宗でも女性の僧侶が増えてきますが、本山の上層部を見ると女性の管理職はいなくなる。他の教団でもそうですが、意思決定の場には女性がいない。取り残されていると感じている人たちの声を聞くためには、より多様な組織になっていくことが求められます。

小島：龍谷大学の真宗学や実践真宗学でも、女性の先生や学生は少ないですよね。

岩田：私が学生の時には真宗学科には女性の先生自体がいませんでした。一人もいなかつたので、ロールモデル自体がないというところに将来への不安がありました。この問題は、仏教界、宗教界全体で言われていることで、「現代日本の仏教と女性—文化の越境とジェンダー」でも、「現在の仏教各宗派で、被抑圧者としての女性の経験を反映させた、ジェンダーの視点からの經典や聖典の問い合わせや再解釈が重要と認識されている例はまだわずかである。これは仏教系大学や教団付属の研究機関が、フェミニズムやジェンダーの視点からの仏教研究を学問的に認知せず、また女性研究者を積極的に育成してこなかったことが原因の一つとして挙げられよう。^{*7}」と指摘されています。

仏教系大学や各教団が持つている研究機関の研究員もほとんど男性なんですね。意思決定機関に女性が参画できる道が非常に限られていて、現場の女性は自分たちの意見がどうやって反映されているのかというところが今一つわからない。それでは希望が持てないという人は結構多いと思うんです。京都女子大学の竹安学長も、センターに期待することとして、現場の女性は変革を叫んでいるから希望を持たせてほしい、研究だけじゃなくて実践ということを発信してほしいと強調されていました。女性も活躍したり、意見が言えたりするんだという希望を持たせてほしい、女性研究者のロールモデルを示してほしいという声はあります。私も大学院に行つてから強く思つていきました。

小島：ロールモデルの問題は大きいと思います。実践真宗学ではどのように僧侶として活動していくかということを考えますが、女性という理由で思いが打ち砕かれてしまうのはという恐れや、将来活動を続けていく想像がしにくいという不安が、自分の中にあります。しかし男性が多い本研究科では、そういう

中村：男性社会の中で形作られてきた見方、価値観が残つていて、やつていくといふのは孤独。あなたが言つてたようにどうしていつたらいいか、自分の頑張りだけではあかんということがあるよね。そういう場で活躍できる女性を育てていくには、産みの苦しみを担つていく世代があると思うけれど、その人たちをどう支えていくのかも大事なことだと思います。地域づくりのなかで女性が活き活きと活躍したり、生きづらさを感じている女性が生活しやすい地域を作つたりするためには、それなりのネットワークが必要。私は実践する人たちには、個別ではなく、力を合わせて次の人を育てていく意志を持つてもらいたいと思っています。

小島：センターの目的^{*9}としても、実践者との連携と支援ということがあげられていましたね。

岩田：そうです、そうです。

中村：人との出会いのなかで、無意識に自分が行つてた差別や抑圧に気づかされるチャンスというのがあるよね。だから実践者のみなさんは、色々なところに出かけて、「自分には関係ない」とか「差別してない」と思わず自分の方に目を向けて変わつていくチャンスを増やしていってほしいです。

小島：今日は貴重なお話をありがとうございました。

中村：そうですね。意思決定の場に入つても孤独ですよね。

岩田：そう、しんどいと思います。

宗派を超えた連携

中村：これからも頑張ろうと思った」という視点は社会に大きな変革を求めるものだと、シンポジウムでも指摘されました。

[7] 川橋範子「序章 越境する「仏教とジェンダー」研究」那須英勝、本多彩、碧海寿広編『現代日本の仏教と女性—文化の越境とジェンダー』(法藏館、2019) p18
[8] 女性室は、真宗大谷派が女性の宗門活動推進に取り組むために1996年7月に設置した機関。目標すべき教団像として「男女両性で形づくる教団」を表明し、様々な活動を開催している。Webサイト「女性室　あいあうNET」(<https://aiia-higashihonganji.net/jyoseishitu.html>)を参照。
[9] 「センターの目的」は、龍谷大学ジェンダーと宗教研究センターWebサイト(<https://grrc.ryukoku.ac.jp/outline/>)を参照。

実践真宗学研究科公開シンポジウム

「看護と仏教の連携を求めて

「多死社会の終末期に看護者と仏教者は何をすべきか」

何をすべきか？」

You, Unlimited
龍谷大学

龍谷大学大学院
実践真宗学研究科
公開シンポジウム

看護と仏教の連携を求めて

-多死社会の終末期に看護者と仏教者は何をすべきか-

日時 2020年12月17日(木)13:15~16:45 参加無料
要事前申込

会場 龍谷大学 大宮学舎 清和館3階ホールより
オンラインZOOM開催

COVID-19感染防止対策を考慮して、オンライン会議(zoom)で開催します。
開催URLと参加申し込み方法は、実践真宗学研究科のHPでお知らせします。

講師
東京女子医科大学教授 長江 弘子 氏 国立がん研究センター 中央病院 講師 関本 翼子 氏
エンドオブライフ学会副理事長
龍谷大学文学部講師 鍋島直樹 氏
実践真宗学研究科長、龍谷宗教研究所主任

司会
サフィール代表取締役、龍谷宗教研究所、北里大学石道寧寺西林 河野 秀一 氏
実践真宗学研究科教授 森田 敬史
実践真宗学研究科教授 中村 陽子
准教授 梶 妙花

お問い合わせ: 龍谷大学文学部教務課(大宮学舎) 075-343-3317(日曜除く)
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1 https://www.ryukoku.ac.jp/
主催/龍谷大学大学院実践真宗学研究科、龍谷大学世界仏教文化研究センター
後援/京都府看護協会

今年度の実践真宗学研究科公開シンポジウムは新型コロナウイルスによりオンライン開催となつた。「看護と仏教の連携を求めて」「多死社会の終末期に看護者と仏教者は何をすべきか」と題し、現代社会における医療現場の現状から看護と仏教の連携による可能性について考えていくこととなつた。

座長として河野秀一先生をお招きし、講師として長江弘子先生・関本翼子先生・鍋島直樹先生にご講演していただいた。まことに患者さん本人の意思中心・チームによる早期からの継続支援・ヒトとして尊重した意思決定の実現について強調され、長江先生からは、エンドオブライフケアにおいて患者さん本人の人生に焦点を当てるとは、自分の考えを話してもらわなくてはならず、そのためには考へる準備が必要なのだとされた。自身を見つめることで、「熟考」が大切であるが、そこには患者さんの様々なバリアがあり、バリアを軽くするために、過去の振り返りから将来のイメージや見通しをもつて今の気持ちを見て、自分が何を大切にしているのかを意識化することを「熟考」として提案された。

また、支援者としては一人の人間として自身を振り返り、他人と分かり合えた経験を作ることが大切であるとされた。語る場や機会作りとして、お寺を通じて集まり、生きること死ぬことについて語る「let's talk day in 小倉」を取り上げられ、地域・日常の中に意識的に入れる取り組みについて挙げられた。また、アドバンスケアプランニング(以下、ACP)についても取り上げられており、ACPはどのようにしたいかという患者さん本人の意思表明から支えることが始まり、治療の選択がメインではなく当事者にとって自分を知る・支援者としてその人を知ることであるとされた。





「…など共通することの他に、人によって大切にしていることがあるとされた。また死が近づくにつれて意思は変わることもあり、これらの意思を聞く大切さを述べられた。グッドデスへの捉え方については、患者さんが「意識が明瞭」「負担にならない」「他人の役に立つ」ということが重要であると考える一方で、医師にはその認識は低いとされ、患者さんと医師が重要な差があると考えることには差があることが述べられていました。そして人生において大切だと考えること・覚えてもらえてもらいたいこと・話しておきたいことを過去・現在・未来から対話で聴きだすという生前のケアの大切さを述べられた。そのACPとして、本人の意思の変化を頭に入れ、何度も話し合いをするなどを述べられ、ケアのプロセスにおいては苦痛の緩和を最優先にして意思・望みを聞き、信頼できる者を含めて話し合いを進め、その話し合いの事実を記すことの大切であるとされた。

またデスカンファレンスにおいて、それは看護師への心の痛みへケア・一人の患者の死を思い出して胸に刻むためにも必要であるとした。また地域で行うことにより意味があり、そこでいろいろな職種の方との関りや患者さんやご家族の思いを知れることを述べられたのであった。さうに、その意志表明支援の人材育成プログラムの結果として、語りにより、死を共感する・自分の生を考える・専門職としての価値の意識や現場での解決の意識が生まれたとされ、このように基礎教育の中で学ぶことの大切さと現場での研修の施設としてどのようなケアを行うのか、目的をもつた話し合いの大切さを述べられた。続いて關本先生からは、看取りとデスカンファレンスについてお話をいただいた。終末期がん患者さんの意思決定において、そこには生きている意味を求める叫びや残された時間への苦しみなどがあるのだとされた。緩和ケアの遺族へのアンケートでは、望ましい死のあり方として苦痛がないことや望んだ場所で過

現在・過去・未来の軸を置いてそこには本人のみでなく、家族の意向やケア提供者の判断をあらわす対話も欠かすことはできず、そこから本人にとっての最善のケアへと向かわれるのであつた。さうに、その意志表明支援の人材育成プログラムの結果として、語りにより、死を共感する・自分の生を考える・専門職としての価値の意識や現場での解決の意識が生まれたとされ、このように基礎教育の中で学ぶことの大切さと現場での研修の施設としてどのようなケアを行うのか、目的をもつた話し合いの大切さを述べられた。続いて關本先生からは、看取りとデスカンファレンスについてお話をいただいた。終末期がん患者さんの意思決定において、そこには生きている意味を求める叫びや残された時間への苦しみなどがあるのだとされた。緩和ケアの遺族へのアンケートでは、望ましい死のあり方として苦痛がないことや望んだ場所で過

じくコメンテーターの中村陽子先生からは、患者さんは自身の人生の否定や不安定な心について医学の外に答えを求め、宗教だけが医学と違つて心を寄せる「スピリチュアルケア」と相手の意思を述べられることが可能であるとされた。その中で看護と宗教の連携があり、地域での看取りの中で宗教者がいかに役割を果たせるのかを問われた。生きていく中で苦しみと医療が出会うのは最後の時であり、その人らしく地域で生きていくには看護と宗教者との連携が大切だとされた。また同

じくコメンテーターの森田敬史先生からは、自身の病院勤務での経験から目の前の患者さんのために働くということをいかに意識づけるかが重要だとされた。さうにこのシンポジウムでは、意見決定や対話のキーワードからそのように目の前の方の意思を受け取ることが述べられたとされた。

そしてそのことと重ねられ、対話はそれぞれの役割の人に断片的であるからこそ連携が大切になるとされ、それぞれの立場の方への言葉をつなぎ合わせ患業者さんへのケアへと向かうことを語られた。そして、宗教者は死と関わる背景を持つからこそ患者さんは意思を発し、また意思を発せられない患者さんにもその方の発しようとする意思を宗教者であるからこそ受け取ることができるのではないかと、宗教者として関わる意義を述べられた。その後も院生からの質疑により議論が交わされた。

人の生死に携わり続けている宗教者は、病院で死を迎えることが多くなった現代において生死には生きている意味を求める叫びや残された時間への苦しみなどがあるのだとされた。緩和ケアの遺族へのアンケートでは、望ましい死のあり方として苦痛がないことや望んだ場所で過

テーマは「子どもへの伝道の可能性について——カルタ遊びで浄土真宗の教えの理解と記憶を——」です。

きっかけは「浄土真宗に初めてご縁のあつた方や次世代を担う子どもたちに、真宗の教えを分かりやすく伝える方法はなにだろうか?」さらに「記憶にとどめていただくためには、どうしたら良いのだろうか?」という思いからです。

●子どもへの伝道の現状

かつて子どもへの仏教の伝道は「仏教絵本」が作られ、日曜学校など子どもの遊びの中で行われていました。今、浄土真宗本願寺派の寺院では、主に日曜学校や子ども会活動の場で僧侶からの法話、また仏教絵本や紙芝居、各宗祖の伝記本、まんが本などが子どもへの伝道ツールとして利用されています。しかし、少子化の影響等もあり寺院活動に参加する子どもは少なく、子どもたちへの伝道が十分に行われているとは言い難い現状があります。

●課題と解決に向けて
このような昨今、子どもへの伝道の場から見えてくる課題は、1、寺院の減少に伴い伝道の場が減少していること。2、伝道の方法が模索されているとはい、僧侶から子どもへの一方的な法話が中心であり、新たな工夫が必要ではないかということです。

一方的な話は、聞く側は退屈で窮屈さを感じるので?と思い、伝道方法に焦点を当て、一方向の伝道から双方向、全員参加型の伝道方法を考えています。その手段としてカルタを用いることはどうでしょうか。カルタはいつでもどこでも気軽にでき、大勢で楽しく遊ぶことができ、繰り返し遊ぶことにより記憶ができるという利点もあります。

●カルタの歴史

みなさんは「いろはかるた」をご存じですか?「犬も歩けば棒に当たる」論より証拠「花より団子」など、諺としてよく知られていますね。

「いろはかるた」は、江戸時代、元禄・享保の頃には、女性と子どもの遊興用に考案され存在していました。江戸時代後期はかるたの全盛期となり、多くの家庭では年の暮れになると「いろはかるた」を買い求め、祖父母や親が子どもの相手をして遊びを通じていろはの文字を教えたそうです。

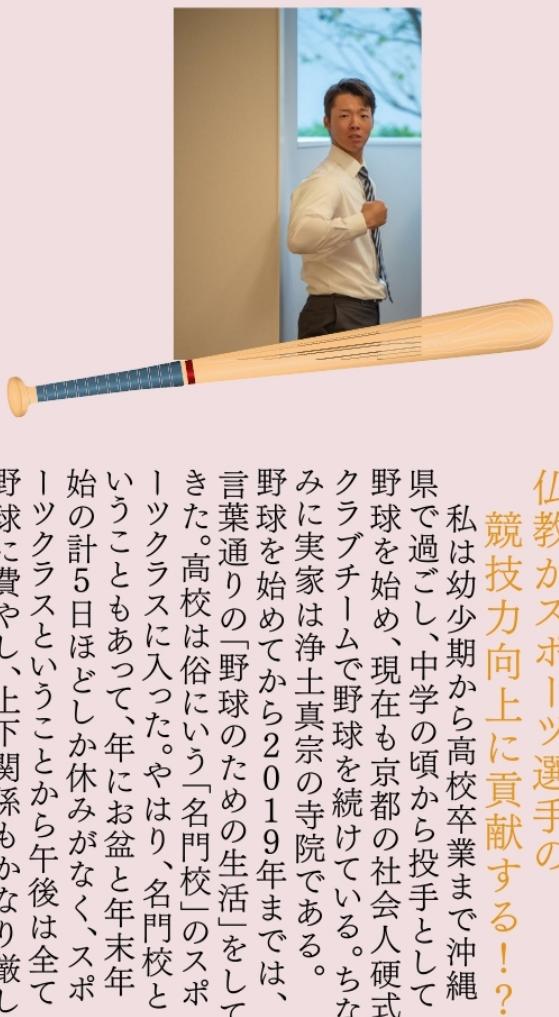
●カルタの活用へ伝道につながる可能性を見出すために
かつて識字教育という役目を果たした「いろはかるた」。それと同じような効果を狙い、真宗の教えの理解と記憶に残るようなカルタを制作。伝道につながる可能性を見出し、伝道の一方法を確立したいと考えています。

制作に着手したところですが、難しいことがあります。例えば、親鸞聖人や生涯に関わる出来事は画像化しやすいのですが、教えを画像化すること。もう一つは、親しみがあり、心に残る読み札をいかに作るか、ということです。

印象深い言葉や楽しい遊びの記憶は、大人になつてもよみがえつてくることでしょう。それをまた自分の子どもへ教えるとう、普段の生活の中での繰り返しにより親から子どもへと教えが引き継がれていくと考えています。

自作のカルタに、子どもたちはどのような反応を示してくれるのだろうか?期待と不安を抱きつつ、2021年3月の完成を目指しています。

仏教がスポーツ選手の競技力向上に貢献する！？



私は幼少期から高校卒業まで沖縄県で過ごし、中学の頃から投手として野球を始め、現在も京都の社会人硬式クラブチームで野球を続けている。ちなみに実家は浄土真宗の寺院である。野球を始めてから2019年までは、言葉通りの「野球のための生活」をしてきた。高校は俗にいう「名門校」のスポーツクラブに入った。やはり、名門校ということもあって、年にお盆と年末年始の計5日ほどしか休みがなく、スポーツクラスに入つた。やはり、名門校と野球に費やし、上下関係もかなり厳しく、指導者や先輩が右と言えば右が正解というような高校生活だった。常に神経をすり減らしながらの生活により、毎年辞める選手も少なからずおり、私も1年の頃にボールを投げる時に体が思い通りに動かなくなるという「イップス」という動作障害が起るようになつた。高校時代の唯一の救いといえば、甲子園に3年の春夏と2回出場することことができたことであり、この甲子園があつたから3年間やり続けることができたのだと思う。

龍谷大学入学後は、海外のプロチームで野球をしたいという思いがあつたので、かなり真面目に練習をしていた。おそらく150人以上いる大学の硬式野球部の中で1番練習していたと思う。海外のプロチームに入るという目標は2019年まで持つており、実際に「トライアウト」と呼ばれる入団テストをいくつも受けた。結果的にはどこの国

以上のように私のこれまでの人生に野球は欠かせないものになつてしているのだが、野球では基本的に上手くいかないことが多かつた。野球とは関係ないような精神的な悩みも競技に影響を与えていた。スポーツというものは、その競技技術が優れているだけでは結果を出す出来ず、精神面も優れていないといけない。近年では精神面に焦点を当てて競技力の成果に貢献する「メンタルコチ」の存在がスポーツ界で当たり前になつてきていている。そこで、私自身が浄土真宗の僧侶であるといふことと、自身が野球においてイップス等で苦しんできたこと、現時点でスポーツと仏教に関する研究が少ないとことから、僧侶がスポーツ界においてメンタルコーチの役割を果たせる可能性があるではないかと考えている。例えば、野球において投手は「常に同じフォームで投げる」という指導を受けことが多いのだが、真面目な選手であればあるほど、同じフォームで投げないといけないと思いつつ、次第に投げ方がわからなくなるという状態に陥ってしまう選手も少なくない。そこで、仏教の根本的な思想の1つである「諸行無常」を選手に伝えようとするとどうなるのであろうか。まだ研究途中の段階であるのでその効果はわかつていないが、僧侶がメンタルコーチになるということは選手の不安を少なくする役割があると考えている。スポーツ選手にとって不安は大敵である、そのような選手の不安を少しでも軽減することで、結果的に選手のパフォーマンスアップにも繋がる手段はないだろうか。このようなにスポーツと仏教を密接に結びつけて考えることは、あまり前例がなく、多くの可能性を秘めていると私は考えている。読者からのアドバイスを請いたいと思う。

| ヘッドライトに照らされて |

実践真宗学研究科2年次生 佐々木正暁

としごろ念佛して往生ねがふしるしには、もとあしかりしわがこころをもおもひかへして、
とも同朋にもねんごろにこころのおはしましあはばこそ、
世をいとふしるしにて候はめとこそおぼえ候へ。よくよく御こころえ候ふべし。

『浄土真宗聖典』(註釈版) 742頁



御同朋という言葉は、親鸞聖人が聖典に何度か書かれているもので、解釈の仕方は人それぞれかもしれません。私は、同じ心を持った仲間、あるいは同志と解釈しています。仏教教団においては、師と同じくし、師の教えと共に聞き、その教えを生活の拠り所として生きる人のことを指します。ここでは、そんな御同朋という言葉を身をもって体験したことを紹介させてもらいたいと思います。

私はドライブが好きで、よく休日や、時間が空いたりしたら、1人でちょっと遠いところに行ったり、友人と買い物に行ったりします。これは2年前、私が自動車の免許を取って間もなくのことです。私は実家が大阪なのですが、ふと岡山に行きたいと思い、何も計画を立てず、どこに行くかも特に決めず家を飛び出しました。そして家の近くの高速道路から乗っていた時のことです。音楽をかけながら鼻歌交じりに高速道路を走っていると、対向車がヘッドライトをつけたり消したりしながら走ってきたのです。私は何だろうと思い、疑問に感じながら車を走らせていました。すると、ちょっと進んだ先に、パトカーらしきものが2台停まっていたのです。おそらく、スピード違反の取り締まりの様なことをしていたのです。そこで自分はようやくある事に気づいたのです。さっき灯りをつけたり消したりしていた車は、この先でパトカーが検問をしているから、「スピードを落とすんやで」「注意するんやで」ということを見ず知らずの私に知らせてくれたのだなど。その後、家に帰ってそのことを父親に言ったところ、思いもよらぬ言葉が返ってきたのです。それは「親切な人やったなあ、まるで仲間やん」と言ったのです。それは私にとって思いもしない言葉でした。全く私と関係がない人なのに、まるで仲間であるかのように教えてくれる。

それは浄土真宗の考え方でも言えるのではないでしょうか。例えば法座や法要の本堂でたまたま横に座っていた人に、同じ志を持った仲間であるかのように分からぬことやその寺院のことなどを教えてくれる。このようにしてお互いに理解し、分かり合うことが重要なではないのかと思うのです。阿弥陀様の救いを拠り所として、共に念佛を喜ぶ人々は、生まれや育ち、上下関係、すべての人たちが関係なく御同朋(仲間)とされたのが親鸞聖人なのです。

私たちは、完全には出来なくても、偏見を捨て、人と比べない、決して見捨てないということを実践し、努めていくことが重要なではないでしょうか。みんなが一つになって繋がっていく、御同朋の気持ちというものをこれからも大事にしていきたい。そう思われる経験でした。



第6回実践Radio

ありがとうTさん
感動の続きについて
さあ、はじまるよ！！



第5回 実践Radio

院生が愚痴を聞く!?
歌を歌う!?
大学院 = 無理や夢Xただの場所

大学院生の
声をお届け!

～入学志願者のための～

実践真宗学研究科 YouTubeチャンネル



第9回 大学院ニュース！
特集 大学院の今が語り！
布教使課程とは？



第8回
実践OBの先生が登場!!



第10回 合言葉
～入学を意識するきっかけ～
実践Radio
やなぎだの入学経験!!

CC



Copyright
RYUKOKU 2021
Graduate Univ.
shin Buddhist school of
Studies all right
reserved.

